

北翔大学におけるアスレティックトレーニング教育の 意義と展望

Implications and Perspective of Athletic Training Education in Hokusho University

吉 田 真¹⁾
Makoto YOSHIDA

吉 田 昌 弘¹⁾
Masahiro YOSHIDA

I. はじめに

北翔大学は、北海ドレースメーカー女学園を起源とし、1966年に北海道女子短期大学に体育科が開設されて以降、道内はもとより国内そして国際的に活躍するトップアスリートを生み出す伝統ある教育機関である。体育科の開設に伴い、陸上競技者として世界で活躍した南部忠平先生が教授として教鞭をとるとともに、課外活動では体育系学生団体の力強い活動が伝統となっている。教学において保健体育の教職課程で学びを修めた多くの卒業生たちが、学校現場で活動している。これまでの本学の教学と体育スポーツの歴史ある伝統を発展させる形で、2009年に生涯スポーツ学部が開設され、トレーナー教育のニーズに応えるうえで、アスレティックトレーナー（以下AT）の養成校として認可を受けて現在に至っている。本稿では、AT養成課程を置いている北海道内唯一の大学として、アスレティックトレーニング教育の意義と今後の展望について述べることを目的とする。

II. 国内外で活躍した本学出身の競技者

これまで本学に籍を置いた競技者を振り返ると、1932年のロサンゼルスオリンピックにおいて陸上競技の三段跳びで金メダル、走幅跳で銅メダルを獲得し、1966年～1984年にかけて本学の教授として教鞭をとった南部忠平教授を筆頭に、北風沙織選手、平加有梨奈選手が陸上競技で今現在も活躍している。

冬季競技に目を向けると、女子ジャンプ競技の先駆者である山田いずみ選手をはじめ、女子ボスブスレーでは松野真奈美選手がトリノ（2006年）とバンクーバー五輪（2010年）に出場している。また女子モーグル競技には、村田愛里咲選手がバンクーバーとソチ五輪（2014年）に出場した。さらに、女子アイスホッケー競技では、卒業生の久保英恵選手と坂上智子選手が、そして在校生の堀珠花選手と藤本もえこ選手の4名がソチ五輪に出場した。

加えて、大学生の五輪といわれるユニバーシアード大会には、2011年のエルズルム大会（トルコ）に3名、2013年のトレンティーノ大会（イタリア）には4名、2015年のストラ

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

キーワード：アスレティックトレーニング、教育、スポーツ

ブスケプレソ・オスルブルエ・グラナダ大会（スロバキア・スペイン）には5名が出場した。

開学当初は女子校であったが、2000年の男女共学化とともに、男子学生選手による競技活動が活発となり、女子学生選手を凌ぐ勢いで活躍している。しかしながら、本学出身の競技者のうち、女性選手の活躍が名実ともに際立っている。

国内外で活躍する競技者とともに大学生活を過ごすことは、競技者のパフォーマンスを直に観察し皮膚感覚で体感するだけでなく、日常会話を通して思考過程に触れることができる。このような環境は、北海道内の大学およびAT養成校を見渡しても、本学が唯一であり、この優位性を活かした学びの展開が可能な恵まれた環境であるといえる。

Ⅲ. わが国におけるAT養成の歴史

わが国におけるトレーナー教育の歴史を紐解くと、わが国におけるスポーツ指導者養成は、1964年（昭和39年）の東京オリンピックの開催が大きな起点となっている。東京オリンピック開催の3年前1961年に、わが国におけるスポーツ振興の施策に関する基本を明らかにするためにスポーツ振興法が制定された。それから50年を経て、2011年（平成23年）にスポーツ振興法を発展させる形で、国がスポーツに責任を持ち国家戦略としてスポーツを活用する法的根拠となるスポーツ基本法が制定された。スポーツ振興法からスポーツ基本法に移行するまでの間、日本体育協会はスポーツ指導者養成の一環として、トレーナー資格の制度化と認定に取り組んできた¹⁾。

ATが制度化される以前、医療資格を有する鍼灸師、マッサージ師、柔道整復師、理学療法士などが、いわゆるトレーナーとして既に活動していた。しかしながら、競技スポーツに関わるカリキュラムが組み込まれていなかったため、その穴を埋める形で保健体育教諭の養成課程を修めた者もいわゆるトレーナーとして活動していた。当時のトレーナーは、このように多様な教育背景をもとに活動する中で、スポーツドクターとの連携が必須となる国内外の時代背景もあり、共通言語を持って活動できる専門家の養成としてATが制度化された。平成27年度時点で、養成校は大学院1校、大学30校、短期大学部3校、専門学校33校の計67校が認定を受け、150名以上が専任教員として教鞭をとっている。

ATという資格は、アメリカのNATA (National Athletic Trainers' Association)のATC (Athletic Trainer, Certified)、カナダのアスレティックセラピスト協会が公認するCAT (Certified Athletic Therapist)、そして日本体育協会公認のATがある。欧州諸国では、AT資格は存在せずトレーナー活動は理学療法士が専門資格を取得してその任を担っている。

現下、日本選手は国際大会でも目覚ましい活躍を果たしており、オリンピック・パラリンピックやユニバーシアードなどの国際総合競技においてトレーナーは当然のように帯同する時代となった。選手の国際化とともに、わが国のATも国際基準に見合う能力を備える必要に迫られていることを自覚する必要がある。

Ⅳ. アスレティックトレーニング教育における3つのポリシー

北翔大学の3つ目の学部として、2009年に

生涯スポーツ学部が開設された。生涯スポーツ学部の教育目的は、「スポーツや健康に関する理論や実践について探求し、主体的・活動的・健康的な生き方を実践・支援できる人材を育成し、生涯にわたってスポーツを楽しむことができる健康で豊かな生涯スポーツ社会の構築に貢献すること」とある。この学部の教育目的を踏まえて、スポーツ教育学科の教育目的は、「スポーツ教育学に関する高い専門知識と実践的技術を学び、生涯スポーツ社会の実現に向けて、競技スポーツ、学校教育、地域社会で活躍できる人間性豊かな人材を育成すること」を目的としている。

AT養成課程をスポーツトレーナーコースに設置するにあたり、アドミッション、カリキュラム、そしてディプロマの3つのポリシーをそれぞれ次の通りとした。アドミッションポリシーとして、1つ目に選手やチームの競技力向上と傷害予防のために、トレーナーとして献身的なサポート活動に情熱を抱いている人、2つ目にスポーツ医科学に強い関心・興味を持ち、生涯を通して主体的に学ぶ意欲を持っている人、そして3つ目に優しい心と強い責任感を持って人との関わりを大切にする人を受け入れ方針とした。

次に、教育課程となるカリキュラムポリシーとして、全学共通科目を通して幅広い教養を兼ね備えた生涯学習者として自立し、現代社会の様々な問題を解決するための課題探求能力を身につけ、学科専門科目を軸にスポーツ教育に関する専門的知識を体系的に学び、生涯スポーツ社会の実現に向けて知識に基づく実践力と行動力を身につけることができるように編成した。そして、コース専門科目を軸として、スポーツ医科学に関する専門的知

識を体系的に修得し、競技者の競技力向上と傷害予防のために、あるいは生涯スポーツ実践者におけるスポーツの享受と傷害予防のために必要な専門的技能を身につけることを目標にしている。

アスレティックトレーニングの専門教育を通して、卒業時には、次の3つのディプロマポリシーに基づく人材を社会に輩出することを目指している。1つ目、個として自律し自立した自己管理能力および生涯学習能力を身につけ、2つ目にチームあるいは社会や組織といった集団において和を尊ぶとともに、チームの一員として献身的な行動ができる人材に成長することを期待している。そして、最後の3つ目として、学問の体系的な理解を通して、多様化かつ複雑化した問題を俯瞰しつつ論理的思考に基づいて課題を解決するための能力を兼ね備え、豊かな発想力と創造力により生涯スポーツ社会の構築と発展に貢献できる社会人として活躍することを希求している。

以上、学部学科の教育では、生涯スポーツ社会の実現に向けて、その構築に貢献することができる人間性豊かな人材を育成することを目的としている。学部学科での教養教育そして一部専門教育を踏まえて、アスレティックトレーニング教育を通してさらに専門性を高めて、専門職であるATとして生涯スポーツ社会の実現に貢献するための教育課程を編成・実施している。

V. 大学におけるアスレティックトレーニング教育の意義と展望

ATは競技者の競技力向上と傷害予防に取り組むうえで、競技者の心身の状態、すなわ

ちコンディションを正確に把握し、調整する（コンディショニング）ための専門知識と技能が求められる。ATの具体的な役割は、1）スポーツ外傷・障害の予防、2）スポーツ現場における救急処置、3）アスレティックリハビリテーション、4）コンディショニング、5）検査・測定と評価、6）健康管理と組織運営、7）教育的指導の7項目について高度な知識と技能を備え、スポーツドクターおよびコーチとの緊密な協力のもと、競技者の競技活動を支えることである¹⁾。これら7つの役割の中でも、とりわけ競技者のコンディションを把握して競技者が抱えている課題を抽出するための検査・測定と評価、そしてその課題・問題を解決するために運動指導や自己管理の教育的指導が重要になる。すなわち、アスレティックトレーニング教育を学術基盤に専門技能習得のための実践を通して、課題探求能力と問題解決能力を備えることにつながる。そして、これらの修養は、これからの時代を生き抜き、新たな世界を開拓し創り上げるうえで重要な能力と考える。

課題探求力について、中央教育審議会が初等中等教育と高等教育との接続の改善についての答申（平成11年12月16日）において、次のように定義している。課題探求能力とは、「主体的に変化に対応し、自らの将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を指す。中央教育審議会はこの答申の中で、高等教育の役割として学部段階において、初等中等教育における「自ら学び、自ら考える力」の育成を基礎に「課題探求能力の育成」を重視するとともに、専門的素養のある人材として活躍できる基礎的能力等を培うことを

基本とする」と述べている。ATはアスレティックトレーニング学を学術的基盤として、日々進歩する競技スポーツに取り組む選手を支援するとともに、健康なからだづくりと豊かな生活の一環としてスポーツを享受する学校スポーツや生涯スポーツの従事者を支援することができる専門家である。

前出した7つの役割を果たすうえで、ATはアスレティックトレーニング学として、競技に関する知識とスポーツ医科学に関する知識と技能を修得する。そしてスポーツ現場で自らの専門性を発揮して、ドクターやコーチとのパイプ役、競技者に対する指導的役割、スポーツ現場の医科学サポートのディレクターとして活動するために、コーディネーション能力とコミュニケーション能力が求められる。このような役割は、2006年から経済産業省が提唱する社会人基礎力を備え高めることに繋がるといえる。社会人基礎力とは、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の3つの能力と12の能力要素から構成され、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力である。

大学という高等教育機関でアスレティックトレーニング学を教育するにあたり、職業教育に終始することなく、アスレティックトレーニング学という学問の探究に努めなければならない。イギリスの哲学者John Stuart Mill（1806－1873）によると、「大学は職業教育の場でなく、大学の目的は熟練した法律家や医師、または技術者を養成することではなく、有能で教養ある人間を育成することにある」という²⁾。わが国の学校教育法をみると、「大学は学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究

し、知的、道徳的および応用的能力を展開させることを目的とする」とある。また、専門学校（専門学校）においては、「職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し、または教養の向上を図ることを目的とする」と定められている。このように、大学と専門学校では果たすべき使命と役割が異なることから、同じ資格を持つATであっても北翔大学で学びを修めたATは、スポーツ教育学という学士に値するよう、アスレティックトレーニング学の学究に努める責務がある。

北翔大学においてアスレティックトレーニング教育を学ぶにあたり、保健体育教諭課程で学びを進める学生とともに、正課および課外活動を通して大学生活を過ごすことは、卒業後に学校現場やスポーツ現場において他職種と円滑な共通理解と迅速な協働が期待される。多様な職種と連携を図り業務に取り組むうえで、共通言語を持って意思疎通を図ることは必須の時代であるなか、さらに人生のあつひと時、同じ釜の飯を食べて同じ時を過ごすという経験は、より円滑な共通理解と迅速な協働をもたらし、学び舎である北翔大学をハブとした独自の人的ネットワークを持って、生涯スポーツ社会の構築に資するものと考えらる。

VI. おわりに

北翔大学は、保健体育教諭を目指す学生たちとともに、AT養成課程にてアスレティックトレーニング教育を学ぶことができる北海道内唯一の大学である。正課はもとより、課外活動において、過去そして今現在も、国内外トップレベルの競技者とともにアスレティ

ックトレーニング教育の学びを広め深めることができる伝統ある大学である。このような恵まれた学びの環境で、アスレティックトレーニング教育を通して、課題探求能力と問題解決能力を備え、豊かな人間性を持って生涯スポーツ社会の実現に寄与する人材の養成と輩出に向けて、われわれ教員は質の高い教育に取り組まなければならない。

引用図書

- 1) 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト編集班：第1巻アスレティックトレーナーの役割. 文光堂, 東京, 2007.
- 2) J.S.ミル著, 竹内一誠訳：大学教育について. p12, 岩波書店, 東京, 2011.